

報告：第6回日本リハビリテーション工学協会・全国頸髄損傷者連絡会・NPO 法人ケアリフォームシステム研究会合同シンポジウム

「つながろう！～みんなで考える車椅子ユーザーの住まいづくり～」

総合せき損センター 医用工学研究室 江原 喜人

2017年3月25日(土)、福岡市にて「つながろう！～みんなで考える車椅子ユーザーの住まいづくり～」をテーマにシンポジウムが開催された。筆者は、日本リハビリテーション工学協会（以下、リハ工学協会）に所属し、今回シンポジウムの実行委員長として企画や運営等に携わることができた。リハ工学協会と全国頸髄損傷者連絡会との合同シンポジウムは、これまでに「外出」や「住まいづくり」、「褥瘡」などをテーマに5回行われている。そのいくつかに参加した経験をもとに、さらに新たな試みとして高齢者や障害者の住まいづくりに取り組む工務店の全国ネットワーク組織である「NPO 法人ケアリフォームシステム研究会（以下、CRS 研究会）」を主催に迎え、3団体による「住まいづくり」をテーマとした合同シンポジウムを開催できたことを嬉しく思う。

参加者は42名で、職種はセラピストやリハエンジニア、福祉用具業者、福祉職、工務店、学生と多岐にわたり、また11名と多くの車椅子ユーザーに参加いただいたこと、さらに現場で設計や施工を行っている建築関係の方々にも多く参加いただいたことは非常に意義深いと考える。

シンポジウムは、「①住まいづくりに関する情報提供／事例報告」および「②パネルディスカッション」の2部構成とした。

第1部では、5人による話題提供を行った。最初

に筆者より、住宅改修相談の進め方の一例として「専門医療施設における支援の流れ」についてお話しした。住環境整備を進めるうえで重要と考えている「生活方法の伝達とイメージづくり」「シミュレーションの重要性」「生活方法の自己設計サポート」という3つのポイントを中心にお話しさせていただいた。

普段、設計や施工などに関わられている株式会社武藤技建・吉村純一氏と株式会社 神崎工務店・神崎嘉博氏のお二方には「工務店の取り組みと事例報告」として、話し合いの過程で苦労した点やその対処方法、他職種との連携や進め方を失敗しないために工夫している点などを交えながらお話しさせていただいた。

車椅子ユーザーであるNPO 法人 自立支援センターおおいた・神田憲治氏、生活協同組合連合会グリーンコープ連合・小城左貴氏のお二方には「当事者の戸惑いや伝えたいこと」として、車椅子使用者の生活環境および生活方法の紹介を交えながら、当事者がどこに（誰に）相談し、どのように情報を得たか、それは十分だったか、プラン検討の過程で考慮したこと、打ち合わせを順調に進めるポイントは何かなどについてお話しさせていただいた。

第2部のパネルディスカッションは、先にプレゼンを行った5人にCRS 研究会・代表理事の武藤俊之氏をパネリストに加え、第1部で挙げた話題に関する質疑応答、また普段みなさんが感じていること



や抱いている思いなどを自由に発言してもらい、議論する形式とした。今回の議論を進めるなかでも「どこに相談すればいいのかわからない」という長年の課題が出てきた。これは、住環境整備をテーマにした講習会やセミナー、シンポジウム、学会などにおいて、必ずと言っていいほど出てくるものであり、解決できていない大きな問題のひとつである。今回も明確な答えが出たわけではないが、このような機会を通じて議論を続けること、また続けるなかでいるんな立場、職種の方が「つながり」、困った時に相談し合える状況ができることが重要だと感じた。このようないろいろな立場、職種の人が「つながる」機会を作り、身近なネットワークを構築していくことも問題解決に対する答えのひとつであると考えている。この「つながり」は、今回、重視したテーマのポイントでもある。

あと、議論を進めるなかで、個人的に特に印象的だったのが「普通の暮らし」という言葉であった。これを最初に聞いたのは、第5回の褥瘡をテーマとして行われたシンポジウムにおける頸損連の宮野秀樹氏の発言である。カラオケにも行けば、飲みにも行くし、海外旅行だって行く、スキーだって楽しむ。褥瘡ができると、突然、そのような「普通の暮らし」ができなくなる、といった内容であった。なかなか世間一般には、それらのことを車椅子ユーザーがする「普通のこと」と捉えるような認識はまだまだないように感じる。今回は「住まいづくり」がテーマであったが、生活方法を知り、住環境を整えば、1人で外出する、トイレで排泄する、自宅で入浴する…etc、それは当たり前「できること」になり、「普通の暮らし」になる。逆に言うと、生活方法や住環境整備の方法を知らないまま、住環境整備の方法を知らないままでは、できることは非常に限られ

てしまうことになる。最近、「じりつ」を「自律」と表記することも増えてきた。これは、介助など任せるところは任せ、自分でできる（する）ところはする、といったように、自分で生活をコントロールし、組み立てる、といったことである。自分にとって、どのような生活が「普通の暮らし」なのか、もっと大げさに言うならば、どのように人生を設計し生きていくか…そのためにも住環境整備の方法について知り、もっと情報を共有していくことが重要であると再認識した。

なお、今回の会場内ではCRS研究会による住宅改修事例のパネル展示も行われた。住環境整備を進めるにあたっては、まず当事者や家族に生活のイメージを持ってもらうことが重要であると考えている。住宅改修事例のパネル展示は、「まず生活方法や住環境整備の方法を知る」ということにおいて大いに役立つものとする。しかし、今回のシンポジウムでは、チンコントロール操作の電動車いすを使用する参加者も多かったにも関わらず、そのような方々に参考になるような高位頸髄損傷者の事例がほとんどなく、そのような情報も知りたかったといった意見もいただいた。これは、今後の反省点であり、次の機会に活かしていきたいと考えている。

あと、最後にもうひとつ。今回の参加者のなかには顔見知りも多く、その知り合いを通じて多くの方を紹介し合う様子、あちこちで小さな輪ができて話し込む様子が見られた。この小さな個人の「つながり」が増えていき、組織の「つながり」にもなり、問題解決にもつながっていくものと思われる。今回、主催の3つの団体においても「また今度何か一緒にやりましょう！」といった話も出ていた。

今後、さまざまな形で「つながり」が発展していくことを期待してやみません！

